九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

濱文庫所蔵の欧陽予倩致濱一衛書簡について

中里見, 敬
九州大学言語文化研究院 : 准教授 : 中国語・中国文学

https://doi.org/10.15017/19671

出版情報：中国文学論集. 39, pp.150-164, 2010-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

濱文庫所蔵の欧陽予倩致濱一衛書簡について

中里見　敬

1．発見の経緯

九州大学附属図書館中央図書館には、元教養部教授で中国演劇を専門とされた濱一衛（1909 ～ 1984）の旧蔵書が濱文庫として保存されている。濱文庫は当初、九州大学附属図書館六本松分館（前身は教養部分館）に置かれていたが、2009年３月の六本松キャンパス移転に先立ち、2008年９月に箱崎キャンパスの中央図書館へ移管された。なお、伊都キャンパスに新中央図書館が完成する2017年（予定）には再度、移管されることになっている。

濱文庫の移管準備が行われていた2008年６月下旬、筆者は九州大学附属図書館六本松分館図書情報係（当時）の徳元美智子氏より、『濱文庫目録』(1)に未収録の資料が出てきたので確認してほしいとの依頼を受けた。その内容は、雑誌40種、レコード８枚、絵葉書39点、小冊子『謎語奇観』７冊、京劇などで使う拍板（三枚からなる拍子木のようなもので檀板ともいう）などで(2)、以前から濱文庫の最下段に置かれていたものであった。おそらく何らかの事情で他の資料とは別に遅れて受け入れたか、あるいは零砕な資料であるために、目録に採られず請求番号も付与されないまま保管されていたのであろう。そのうち、絵葉書の入っていた紙袋の中から今回徳元氏が発見した二通の書簡は(3)、これまでその存在がまったく知られていなかったもので、とくに紹介する価値の高いものだと思う。

一通は、５月１日付けで入矢義高（1910 ～ 1998）が濱一衛に宛てた書簡で、封筒の消印（昭和43年５月２日）より1968年のものであることがわかる。書簡の内容は、濱が同年３月に角川書店より刊行した『日本芸能の源流』に対して、便箋13枚にわたって詳細に訂正事項を指摘したものである。同書の改訂に備えて、濱はこの書簡を大事に保管したものと推測される。なお、二人は京都大学の同窓で、濱は入矢より１歳年長にあたり、卒業は濱が1933年、入矢が1936年である。この書簡執筆時に入矢は名古屋大学文学部教授であり、その後京都大学文学部教授、花園大学嘱託教授等を歴任した(4)。元曲、敦煌変文、禅語録などの研究で大きな仕事をなしとげ、文献の厳密な読解と校訂で知られている。1948年に『東京夢華録』の会読を開始し、1983年にその訳注を刊行する入矢が、同類の都市繁昌記を駆使した濱の研究書に対して

強い関心を抱いたのは十分に理解できることである(5)。

もう一通は、中国の著名な演劇家・欧陽予倩（1889 ～ 1962）が濱一衛に宛てた書簡である。本稿ではこれについて紹介し、あわせて若干の考察を行うこととする(6)。

2．濱一衛と欧陽予倩の接点

湖南省出身の欧陽予倩は、日本留学中、劇団・春柳社に参加し、早期中国話劇の嚆矢とされる1907年東京での「黒奴籲天録（アンクル・トムズ・ケビン）」公演に俳優として出演した(7)。帰国後は話劇だけでなく、京劇や映画でも俳優・脚本・演出・監督を務め、「北梅南欧」といわれるように梅蘭芳と並び称された(8)。人民共和国成立後は中央戯劇学院の初代院長、中国文学芸術聯合会副主席、中国戯劇家協会副主席等を歴任し、全国人民代表大会代表にも選出された。

濱一衛は1934年５月13日より1936年６月15日までの２年あまり、外務省文化事業部留学生として北京（当時は北平）に留学し、八道湾の周作人邸に下宿した(9)。その間に収集した戯単や唱本など、京劇を中心とした演劇関係の生の資料からなる濱文庫は、中国演劇に関する特色あるコレクションとして今日国内外の研究者に知られている(10)。濱は帰国直後の1936年12月に共著で『北平的中国戯』を刊行し(11)、1944年には『支那芝居の話』を出版した(12)。前者は戯単の複製を折り込むなど芝居通らしい趣向を凝らした豪華本であるのに対して、後者は「現在の支那芝居の全貌をすっかり網羅した」(13)便利な本があればと願っていた濱が、みずから京劇を鑑賞するための実用的な手引きとして執筆したものであり、いまなお好著の誉れが高い。『支那芝居の話』において欧陽予倩の名前は「話劇」の項に見えるだけで(14)、二人が戦前に会ったことを示す資料はないようだ。

その後、松山高等商業学校教授を経て、1949年九州大学に着任した濱は、1953年の『日本中国学会報』第５号に「春柳社の黒奴籲天録について」と題する論文を発表している(15)。この論文は、「東京時代の春柳についての唯一無二の記録である」欧陽予倩の自伝「自我演戯以来」を用い、さらに公演の番付や当時の劇評を丹念に調べて、中国人留学生による「黒奴籲天録」上演を具体的に考証した労作である。欧陽予倩については、「新派、文明戯、旧劇、話劇、映画の各方面に残した足跡は大きい。（中略）その業績については多くの演劇書に記されているからここでは簡単にふれたにとどめる。」と記している。この論文を執筆した1953年時点でも、二人の間に直接の交流があったことを示す記述は見あたらない(16)。

1956年５月から７月にかけて、戦後初めて中国から京劇代表団が来日した

際、団長・梅蘭芳とともに欧陽予倩も第一副団長兼総演出として随行した。京劇代表団は朝日新聞社の招聘で来日したこともあり、『朝日新聞』は連日のように代表団の動向を伝え、劇評を掲載している。いま『朝日新聞縮刷版』（東京本社版）により記事を列挙すると以下のとおりである。

5月14日　（社告）「京劇」を招く　梅蘭芳氏ら85人　今月末から三十回公演
5月17日　梅蘭芳、北京をたつ
5月18日　京劇と梅蘭芳　千田是也「京劇のおもしろさ」
　　梁夢廻「梅蘭芳の人と芸術」
5月18日　うれしい日本公演　梅蘭芳氏、訪日の弁／先発隊香港着
5月19日　（社告）「京劇」公演日程きまる
5月19日　「京劇」の歓迎委員会
5月19日夕刊　京劇先発隊着く
5月20日　“公演成功させたい”京劇孫副団長
5月22日　女優四人をまじえ二十二人　京劇第二陣着く
5月24日　「京劇」を迎えて　梅原竜三郎・中村翫右衛門両氏の対談
5月24日　一行の主な顔ぶれ
5月24日　京劇第三陣も着く
5月24日　（声欄）梅蘭芳の回想と待望
5月25日　梅蘭芳ら香港に到着
5月26日　梅蘭芳、夕方羽田へ
5月26日　（読者応答室から）「京劇」の伝統
5月26日　（社告）京劇第一日演目と配役きまる
5月27日　社説　京劇代表団の来日
5月27日　梅蘭芳氏ら羽田に着く
5月28日　梅氏へ拍手わく　明治座で　猿之助丈へ花束贈る
5月28日夕刊　梅蘭芳氏ら本社へ　早くも歌舞伎座でけいこ
5月30日　（社告）京劇　きょう初日　演目と配役決る
5月31日　京劇の初公演をみて　木下順二「誇張の中にふと実感」　田辺尚雄「梅蘭芳の品位さすが」
5月31日　名演技に歓声わく　京劇、歌舞伎座で幕開け
5月31日夕刊　京劇の魅力１　貴妃酔酒
6月１日夕刊　京劇の魅力２　人面桃花
6月２日　河竹繁俊「京劇とカブキ」
6月３日夕刊　京劇の魅力３　三岔口
6月４日　天声人語
6月４日　猿之助邸でひととき　梅蘭芳一行の歓迎会
6月４日夕刊　京劇の魅力４　秋江
6月４日夕刊　京劇一行、早大を訪問　欧陽予倩氏は30年ぶり
6月５日夕刊　京劇の魅力５　覇王別姫
6月６日　アジアのファッション比べ：京劇代表団とインドの女子大生
6月６日　京劇代表団のレセプション

6月6日夕刊　京劇の魅力6　昔と今
6月15日　京劇一行大阪入り
6月22日　（社告）京劇　再び東京公演　七月八、九、十の三日間
6月24日　「京劇」名古屋で公演
7月5日　京劇　大阪出発遅れる
7月5日　京劇の一行箱根へ
7月7日　久しぶりに見た日本　梅蘭芳氏印象を語る
7月8日　京劇の義演　来る十二日国際劇場で
7月13日　京劇さよなら　上演三十二回　観客は七万人
7月17日　京劇“お別れの会”第一・二陣きょう帰国
7月17日夕刊　梅蘭芳氏ら離日
7月18日　京劇第一陣広州へ
7月26日　梅蘭芳氏ら北京着
7月28日　周首相らがねぎらう　帰京した京劇団を
7月30日　今後の文化交流に期待　梅蘭芳氏日本国民へあいさつ

6月6日以降、報道が少なくなるのは、一旦東京を離れて福岡、大阪、京都、名古屋で公演し、再び東京に戻るという行程であったからである。福岡公演の様子を、『西日本新聞』と『朝日新聞』の記事でたどると、以下のことがわかる。

代表団は6月9日から12日まで福岡・大博劇場で公演するため、7日に福岡入りした。（『西日本新聞』6月9日「改革された京劇へ　梅蘭芳氏ら記者団と会見」）
9日の福岡公演初日は1100名の観客を集めた。（『西日本新聞』6月10日「あふれる中国情緒　京劇の初日　千余名がつめかける」）
14日には福岡を離れて、大阪入りした。（『朝日新聞』6月15日「京劇一行大阪入り」）

以上見たように、当時の新聞報道から中国訪日京劇代表団に対する熱烈な歓迎の様子と7万人の観客を集めた京劇公演の成功を知ることができる。実は前年の1955年12月に中日友好協会の招きにより、二代目市川猿之助（猿翁）を座長とする歌舞伎公演が北京で行われていた。朝日新聞社による京劇代表団招請はその返礼という意味合いがあり、さらにその背景には1954年12月に発足し「自主外交」路線を唱えた鳩山一郎内閣による中国・ソ連との国交回復への期待の高まりがあったのである。

それでは、濱一衛は来日した欧陽予倩と面会したのだろうか。その答えは

12年後の濱の著書『日本芸能の源流』に記されている。

> 日本の演劇は古くは梁楽の影響を受け、更に舞楽の輸入となり、今日まで立派に保存されている。さきに来日された故欧陽予倩氏も雅楽をみた喜びをのべられ、博多大博劇場の頭取室で、手の使い方、足の運びを自分で示され、これはそのまま京劇にある、これはこう変っているといわれ、外国で千二百年の間これだけ立派に保存されていることに大きな感激を受けておられた。（傍点は引用者による）(17)

「博多大博劇場の頭取室で」欧陽予倩と日本の雅楽と京劇の類似について話し合っていることから、この面会が1956年の京劇代表団訪日公演のときであることが確認されるのである。なお、大博劇場は福岡市博多区（当時は区制施行以前）の呉服町にあった劇場である。

また濱文庫所蔵のスクラップ帳には、この京劇公演にあわせて濱が行った講演会の記事と、濱自身が寄稿した解説記事が残されている(18)。いずれも東京本社版ではないために『朝日新聞縮刷版』には出てこないものである。

○『朝日新聞』西部本社版1956年５月16日　浜一衛「京劇の観方　梅蘭芳らを迎える」(19)
○『朝日新聞』西部本社版1956年５月29日「文化短信　京劇講演会」
○『朝日新聞』西部本社版1956年５月30日「京劇の見方講演会」
○『朝日新聞』大阪本社版1956年６月17日夕刊　浜一衛「京劇への案内　見どころはここに」

朝日新聞社主催の講演会は、まず６月２日午後７時から福岡朝日会館文化ホールで、翌３日午後６時からは小倉の朝日新聞西部本社講堂で開催された。京劇代表団の福岡および八幡公演に際して、当地で最も中国演劇に詳しい濱一衛が寄稿や講演を求められるのは当然のことであるし、大阪公演にあわせて大阪本社版の『朝日新聞』に寄稿しているのも、母校の京都大学関係者、おそらく濱の先輩で当時中国文学講座の教授だった吉川幸次郎（1904～1980）あたりから濱一衛に白羽の矢が立てられたものと推測して大過あるまい(20)。

なお、京劇代表団の日本公演については、団長の梅蘭芳が帰国後に『東遊記』を出版しており、６月９日から11日の福岡の大博劇場、および６月13日八幡製鉄体育館での公演についても詳しい記述があり参考になる(21)。ただ

し、濱一衛については触れられていない。

欧陽予倩の書簡には「和您分手转眼三年有余」と書かれている。書簡の日付が1959年11月20日であることから、「お別れしてまたたく間に三年あまり」というのが、1956年６月福岡での面会を指すものと考えて矛盾しない。

戦前北平の周作人邸に下宿した濱一衛は足繁く劇場に通うだけでなく、当時京劇研究の大家であり梅蘭芳のブレーンでもあった斉如山と交流し[22]、魯迅・周作人兄弟の母・魯瑞や魯迅夫人の朱安に面会するなど[23]、多くの知遇を得ている。しかし、欧陽予倩と濱一衛の接点は濱の北平留学時期にはなかったようで、おそらく1956年６月福岡での一回限りであったものと思われる。

図１　大博劇場で取材に応じる欧陽予倩（濱一衛撮影、「戯劇演芸舞台関係写真帳」第三巻所収［浜文庫／集185／３］）

３. 執筆時期と封筒消印の齟齬

書簡の内容に入る前に、執筆時期について確認しておこう。縦書きの便箋３枚に毛筆で書かれた書簡の末尾、署名に続いて記された日付は「一九五九、十一、廿日」である。ところが、封筒裏面に貼付された切手３枚（全部で２角４分）の上に押された消印は、「北京／ 1961．1．9．1 ■／ 23 ／■■■■」（■は印字不鮮明）となっている。つまり、1961年１月９日の消印であり、書簡と消印の日付が１年あまりずれているのである。

一つの可能性として、濱と欧陽予倩の間で複数の書簡のやりとりがあり、書信と封筒がすり替わって、別の封筒に収められたということが考えられうる。だが、現存する便箋の折り目は封筒の大きさと一致しており、その可能性は高くないだろう。もう一つの可能性は、当時の情勢により、日本宛の書簡に検閲が行われ、それに相当の時間を要したことが考えられよう。欧陽予倩のように新中国で高い地位にあった文学者の、しかも学術的な内容の手紙に検閲が行われていたのか、またその結果、書信が１年後に発送されるという状況にあったのか。ここではこれ以上の推測は控えて、書簡末尾の日付と消印の日付の間に１年１ヶ月余りの齟齬があることを指摘するにとどめたい。

４．書簡の全文

以下に書簡の全文を示し、続いて日本語訳を掲出する。字体は繁体字に統一し、標点符号を付した。【　】内は筆者（中里見）が加えた文字や注である。なお、書簡の写真は本稿末尾に掲載した。

濱一衛先生：接到您的信，因爲忙碌一些，照片又没找到，以致遲復，抱歉之至。

現在經常演《琵琶記》【的】只有湘劇和川劇。我找到了一張湘劇「琵琶上路」的照片，先行寄上。我已另請四川戲的演員拍幾張，可能会稍緩一些，但必定辦到。「琵琶上路」就是「乞丐尋夫」，分爲「剪髮描容」、「琵琶上路」兩段。湖南、四川都是唱高腔的，詞句與原本有出入。崑腔戲演久已不見演《琵琶記》，我曾見蘇州仙霓社（崑劇團）演過「賞荷」一折，是卅年以前的事了。京戲裏有演「掃松下書」的，唱的是安徽的高撥子調。四川戲前年曾在北京演出全本《琵琶記》，一連演了三天，共費了十二個小時才演完，我只看了一晚。傳奇戲照原樣搬上舞臺是有困難的。主要因爲冗長而慶場子多。現在要求一晚演完，最長不能超過三個半小時。當然過去的劇本文詞很美，讀起來還是感興趣的，但離今天的觀衆就遠了。

和您分手轉眼三年有餘，時時懷念。近年來我國有些瀕於絕滅的劇種得到復興，北京、上海、蘇州都成立了相當規模的崑劇團。最近見到山東的梆子戲來京演出，頗有意思，惜不能和您共同觀賞。此致

敬禮，并祝　康健　　歐陽予倩　一九五九、十一、廿日

（訳文）

濱一衛先生

お手紙いただきながら、多忙のため、また写真が見つからなかったために、ご返事が遅くなってしまい、大変申し訳ありません。

現在、『琵琶記』をしばしば演じるのは湘劇と川劇だけです。湘劇「琵琶上路」の写真を１枚見つけましたので、とりあえずお送りいたします。ほかに四川戯の俳優に何枚か撮影してもらうように頼みましたので、時間はかかるかもしれませんが、必ず撮影してお送りできることと思います。「琵琶上路」とは「乞丐尋夫」[24]のことで、「剪髪描容」と「琵琶上路」の二段に分けたものです。湖南と四川はどちらも高腔[25]で唱い、その詞句は原本と異同があります。崑腔戯は長いこと（『琵琶記』を）演じていましたが、もう『琵琶記』を演じなくなってしまいました。私は以前、蘇州の崑劇団・仙霓社が「賞荷」[26]の一折を演じるのを見たことが

ありますが、それも30年前のことになってしまいました。京戯には「掃松下書」[27]を演じるものがおり、唱い方は安徽省の高撥子調[28]です。四川戯は一昨年、北京で『琵琶記』の全本を演じたことがあり、３日間連続で演じ、全部で12時間もかかって最後まで演じました。私は一晩見ただけです。伝奇戯【『琵琶記』のような長編の戯曲】は、原作のまま舞台に移すのは困難です。その主な理由は冗長で「慶場子」【お祝いの場面。第二齣「高堂称寿」、第十齣「杏園春宴」などを指すか】が多いからです。現在は一晩で演じきれるよう、また長くても３時間半を超えないよう求められています。もちろん過去の劇本は文辞が美しく、読んで興趣を覚えるものですが、今日の観客にはあまりにも遠いものです。

先生とお別れしてはや３年あまり、懐かしく思い出すことしきりです。近年、我が国では絶滅に瀕していた劇種が復興し、北京・上海・蘇州にはかなりの規模の崑劇団ができました。最近、山東省の梆子戯が北京で公演したのを見ましたが、なかなかおもしろかったです。先生とごいっしょに鑑賞できなかったのが残念です。

ご健康をお祈りいたします。

敬具

欧陽予倩　1959年11月20日

この書簡からわかることをまとめると、以下のようになるだろう。

一、本書簡に先立ち、まず濱一衛が欧陽予倩に対して、明・高明原作の『琵琶記』が現在どのように演じられているかを質問し、またその上演の様子を撮影した写真を所望していた。

二、欧陽予倩から濱への回答として、各地方劇での『琵琶記』の上演状況が述べられている。また湘劇「琵琶上路」の写真が１枚、同封されていた。

三、高明原作の長編伝奇をそのまま上演することが今では困難になっていること、およびその理由が説明されている。

四、３年あまり前に、二人は面会していた。

図２　欧陽予倩から送られた写真、湘劇「打三不孝」（「戯劇演芸舞台関係写真帳」第七巻所収［浜文庫／集185／７］）

なお、写真の捜索は困難を極めたが、濱文庫の「戯劇演芸舞台関係写真帳」第七巻に貼付された写真の一枚に、書簡と同じ毛筆による筆跡で「湘劇「打三不孝」（張廣才罵蔡伯喈三不孝，弋腔戯[29]有這様一段）」と裏書きされているものが見つかった。欧陽予倩が送ってきたのはこの写真に相違ない。

５．濱一衛による『琵琶記』『拝月亭』の翻訳と解説

濱一衛が当時の中国における『琵琶記』の上演状況について欧陽予倩に問い合わせたのは、1959年11月に平凡社より濱一衛の『琵琶記』翻訳が刊行されたことと直接の関係があると思われる。

濱の翻訳は、当時日本の中国文学研究者を結集して編集された平凡社『中国古典文学全集』の第33巻「戯曲集」に収められている。濱一衛訳『琵琶記』は同巻95 ～ 238頁に、さらに濱による『琵琶記』解説が420 ～ 424頁に見える。

濱はこの解説執筆のために、伝奇（南曲、南戯）という全42齣にもおよぶ長編形式の古典戯曲『琵琶記』が、現代においてどのように上演されているかを欧陽予倩に問い合わせ、あわせて解説中に掲載できるような写真を所望したものと推測される。事実、濱の解説には３枚の写真が添えられていて、うち１枚は粤劇の上演シーンである（他の２枚「崑曲の舞台」と「韓世昌の『還魂記』」（楽屋口にて）は「昭和10年頃」という撮影年から、留学中に濱自身が撮影したものと思われる[30]）。欧陽予倩の書簡の日付（1959年11月20日）と『中国古典文学全集』第33巻「戯曲集」の刊行時期（1959年11月21日印刷、同26日発行）をあわせ考えれば、欧陽予倩の返信は濱の解説執筆に間に合わず、そのため欧陽予倩が書簡に記した現代中国における『琵琶記』の上演状況は濱の解説文中に取り入れられることはなく、また送られてきた写真が掲載されることもなかった。

『中国古典文学全集』に続いて、同じく平凡社より1970年に刊行された『中国古典文学大系』第52巻「戯曲集（上）」には、濱の翻訳『南曲拝月亭』が収められている。473 ～ 476頁の解説は濱によるもので、その第４節では明代の南戯『拝月亭』が今日の各地方劇の舞台でどのように上演されているかを、主として傅惜華の論文に依拠しながら次のように論述している[31]。

> 「拝月亭」は今日の舞台には出ていないようである。（中略）傅惜華氏（「国劇週刊」、八六号[32]）は一九〇〇年ごろの、孫彩珠（女形、三慶班、一八四四年生）、朱蓮芬（女形、春台班、一八三六年生）の拝月以来北京

の舞台では見られないという。宮中も市中も同様、これは崑曲の廃退によって起こった事態であると考えられる。この中で請医は京劇の演目となってよく上演され、わたくしも何度か看たことがある。

京劇に請医が残ったようなかたちで、地方劇になお多くの拝月が残っている。崑曲から残ったものもあろうし、その前の弋陽腔（ママ）や海塩腔などから残ったものであろう。傅惜華氏（「戯曲研究」一九五八年第三期[33]）の調査によると、次の通りである。

福建梨園戯（福建省）	全部蒋世隆
川劇高腔（四川省）	全部幽閨記
滇劇（雲南省）	全部幽閨記
漢劇（湖北省）	風雲会（ママ）（搶傘）
秦腔（陝西省）	蒋世隆搶傘
湘劇（湖南省）	搶傘、双拝月
桂劇（広西省）	世隆搶傘、双拝月
湖北高腔（湖北省）	奇逢、拝月
許昌高腔（河南省）	抱傘、拝新月

これで見ると南北を問わず拝月の簡略にした通し狂言またサワリが、いまなお上演されていることを知るのである。

濱は『琵琶記』についても、この『拝月亭』の解説と同じような一節を記す予定であったのだろう。濱が欧陽予倩に対して、『琵琶記』が現在どのような形で上演されているかを問い合わせたのは、まさにそのためであったと考えられる。いま『拝月亭』解説にならって、地方劇に残る『琵琶記』を欧陽予倩の書簡に基づいてまとめれば、次のようになろう[34]。

湘劇（湖南省）	剪髪描容、琵琶上路
川劇（四川省）	全部琵琶記
崑腔（蘇州）	賞荷
京戯（北京）	掃松下書

濱が欧陽予倩からの書簡を大切に保存したのは、入矢からの書簡と同様、将来、『琵琶記』の解説を書き直す機会があれば、欧陽予倩から得られた教示をいかして改訂したいと思っていたからであろう。日中間の通信困難な時代にもかかわらず、解説文執筆のために現代における『琵琶記』の上演状況を、３年前に知りあった欧陽予倩に問い合わせた濱の探求心は、「浜さんの研究

は、まるで刑事が悪漢の足どりを求めて、どこどこまでも追いこんで行くようだ」という目加田誠の濱評とぴったり符合する(35)。

欧陽予倩が濱一衛に宛てた書簡は、中国演劇に限りない情熱を注いだ濱の研究姿勢と、またそれに応えた欧陽予倩の誠実な人柄を示す貴重な資料だといえよう。

注

（1）『濱文庫（中国戯劇関係資料）目録』（九州大学附属図書館教養部分館、1987；改訂第２刷、1988）。本目録は受け入れ当時の教養部分館受入掛長・落石清氏による労作である。

（2） 徳元美智子氏作成の『濱文庫2008年度追加分目録』（［電子ファイル版］福岡：九州大学附属図書館、2008）による。

（3） 濱文庫／追（2008）／48。

（4）「入矢義高先生略年譜」（諸研究会連合編『入矢義高先生追悼文集』東京：汲古書院、2000）参照。

（5） 孟元老著、入矢義高・梅原郁訳注『東京夢華録：宋代の都市と生活』（東京：岩波書店、1983；1993；東京：平凡社、1996）。会読から刊行までの経緯は、入矢による同書「あとがき」に詳しい。

（6）『欧陽予倩全集』全６巻（上海：上海文芸出版社、1990）および蘇関鑫編『欧陽予倩研究資料』（北京：中国戯劇出版社、1989；北京：知識産権出版社、2009）は、ともに書簡を収録しない。

（7） 瀬戸宏『中国演劇の二十世紀：中国話劇史概況』（東京：東方書店、1999）第１章参照。最近の研究に、瀬戸宏『中国話劇成立史研究』（東京：東方書店、2005）がある。

（8） この時期の欧陽予倩については、松浦恒雄「欧陽予倩と伝統劇の改革：五四から南通伶工学社まで」（『人文研究』第40巻第６分冊、大阪市立大学文学部、1988）参照。

（9） 目加田誠「浜さんのこと」（『中国文学論集』第４号、福岡：九州大学中国文学会、1974、６頁。のち浜一衛『支那芝居の話』アジア学叢書76、東京：大空社、2000に再録、６～７頁）参照。濱一衛の年譜と著作目録は、『文学論輯』第20号（福岡：九州大学大学教養部文学研究会、1973）および『中国文学論集』第４号にそれぞれ掲載されているが、両者には若干の異同がある。また、浜一衛『支那芝居の話』（アジア学叢書76）所収の「浜一衛略歴・著述一覧」は両者を併せ、補訂したという。

(10)　濱文庫資料を扱った研究として、以下のものがある。
○康保成「“濱文庫”読曲札記（三則）」(『芸術百家』1999年第１期)
○松浦恒雄「京劇戯単の変遷」(『新中国建国前後における伝統劇の多角的研究』平成十八・十九年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書（課題番号18520273)、2008)
○中尾友香梨「濱文庫の明清楽資料について」(『中国文学論集』37、2008)
○中里見敬「濱文庫所蔵戯単編年目録」(『中国文学論集』37、2008)
○中里見敬、中尾友香梨『濱一衛と京劇展：濱文庫の中国演劇コレクション』(福岡：九州大学附属図書館、2009)
○中里見敬「日本九州大学濱一衛文庫所蔵戯劇資料簡介」(第八届中国古代小説・戯曲文献与数字化研討会、2009)
○中里見敬・山根泰志「濱文庫所蔵唱本目録稿（一)」(『言語科学』45、福岡：九州大学大学院言語文化研究院言語研究会、2010)

(11)　中丸均卿・濱一衛『北平的中国戯』(東京：秋豊園、1936)。

(12)　濱一衛『支那芝居の話』(東京：弘文堂書房、1944)。復刊は、浜一衛『支那芝居の話』(アジア学叢書76、東京：大空社、2000)。

(13)　濱一衛『支那芝居の話』あとがき、267頁。

(14)　濱一衛『支那芝居の話』174頁。

(15)　この論文に先立ち、濱一衛「東京並びに上海に於ける文明戯について」(『松山経専論集』第７号、松山：松山経済専門学校商経研究会、1949）があり、春柳社同人小伝の項に欧陽予倩をあげている（50頁)。

(16)　濱一衛「皮黄之成立」(『松山商科大学開学記念論文集　社会科学の諸問題』松山：松山商科大学商経研究会、1950）535頁、および濱一衛「半新半旧劇の変遷」(『文学論輯』第１号、福岡：文学研究会、1952）48、50、51、52頁には欧陽予倩の所説が引用されている。「半新半旧劇の変遷」53頁は、新劇から旧劇へ転じた欧陽予倩の1918年頃の様子について触れている。

(17)　浜一衛『日本芸能の源流：散楽考』(東京：角川書店、1968）148頁。

(18)　「戯劇関係新聞切抜帳　中華人民共和国編　二十九」(濱文庫／集183／(29))

(19)　この切り抜きには紙名・日付とも記載されていないが、京劇研究者の吉田登志子氏より『朝日新聞』西部本社版1956年５月16日第５面に掲載されたものであるとの指摘をいただいた。吉田氏のご教示に深く感謝したい。

(20)　吉川幸次郎自身も『朝日新聞』大阪本社版５月15日夕刊に「不世出の名優　梅蘭芳」を寄稿している。いま、「梅蘭芳の地位」と改題して、『吉川幸次郎全集』第16巻（東京：筑摩書房、1970）所収。

(21)　梅蘭芳『東遊記』(北京：中国戯劇出版社、1957)。日本語訳に、梅蘭芳著『東遊記』(東京：朝日新聞社、1959) がある。

(22)　濱一衛「相公について：主として品花宝鑑より見たる」(目加田誠博士還暦記念論文集刊行会編纂『中国学論集：目加田誠博士還暦記念』東京：大安、1964) に、以下の記述がある。

> もう留学期を終えて帰国の日の近ずい(ママ)た初夏のある日、当時北京の劇壇で大御所的存在であった斉如山氏が私のために送別会を催して下さった、――誰か中国の方が私のために催して下さった送別会に斉氏が出席して下さったのか記憶がさだかでない。斉氏は梅蘭芳の後楯として梅氏を大きくした人で、当時、北京の少年俳優で小梅蘭芳（一九四七年一月五日飛行機事故で死去）といわれて人気絶頂の李世芳（女形）をひいきにしていた。

(23)　魯瑞と朱安に会った印象を、濱一衛は次のように記している。

> この朱安との関係は奇妙で離婚しなかったというだけ。私も北京で会ったことがあるが、古い型の女である。あまり会話が通訳つきなのでできなかったが、母魯氏の新しい感じと凡そ反対。この母とずっと生活していた。生活費は魯迅が持った。ともかくこの朱安は母の与えた妻、というだけ。(濱一衛「講義ノート　中国文学略説　其三　昭和二十六年度」、浜文庫／日文戯曲／21)

(24)　『六十種曲』本の『琵琶記』第29齣「乞丐尋夫」を指す。

(25)　高腔は崑腔、梆子腔、皮簧腔とならんで四大声腔(しょう)の一つ。

(26)　『六十種曲』本の『琵琶記』第22齣「琴訴荷池」に相当する場面。

(27)　『六十種曲』本の『琵琶記』第38齣「張公遇使」に相当する場面。

(28)　高撥子は徽調の腔調で、京劇に取り入れられた。

(29)　弋腔は高腔と同じ。江西省弋陽県から発生したので弋陽腔ともいう。

(30)　戦前の濱の著書『北平的中国戯』および『支那芝居の話』には、留学中に撮影した、あるいは入手した写真が多数掲載されている。その一部は現在濱文庫の「演劇演芸舞台関係写真帳」第二巻、第七巻に残されている（浜文庫／集185／2，7)。写真「韓世昌の『還魂記』」(楽屋口にて）も現存する。

(31)　著名な戯曲研究家である傅惜華（1907～1970）の兄・傅芸子（1902～1948）は、1932年より東方文化学院京都研究所の嘱託講師となり、京大でも中国語学文学を講じた。1931年に北平国劇学会が設立された際、傅芸子は梅蘭芳、余叔岩、斉如山らとともに発起人に名を連ね、その機関誌『戯劇叢刊』の「発刊詞」を起草している。ほかに同誌に「中国戯曲研究之新趨勢」を寄稿するなど、京劇をはじめとする中国演劇の学術的研究に貢献した。傅芸子

は周作人とも親しく、濱の北平留学と学問形成に直接の影響があったと思われる。また、濱の中国語は満洲旗人の出身で生粋の北京人であった傅芸子ゆずりのものであろう。傅芸子著『支那語会話篇：一名「小北京人」』（東京：弘文堂書房、1938）は演劇を話題として取り上げる点で、汪實棠・濱一衛『中国話教本：北京導游』（松山：松山高等商業学校、1939）に先んじている。傅芸子には『正倉院考古記』（東京：文求堂、1941）、『白川集』（東京：文求堂、1943）があり、両書は2001年に瀋陽の遼寧教育出版社より復刊された。倉石武四郎『中国語五十年』（東京：岩波書店、1973）41 ～ 53頁、および田村加代子「傅芸子との交流・清く澄める白川の水：書きつづりたる文の数々」（『「遊心」の祝福：中国文学者・青木正児の世界』名古屋：名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室、2007）も参照。

（32） 碧蕖「「拝月」之研究（七）」（『北平晨報・国劇週刊』第86号、1936年６月11日。浜文庫／集184 ／１）の「附語」に、「旧京徽班中、昔年擅演此劇者、三慶部則有孫彩珠、春台部則有朱蓮芬；其他無聞。及至近三十年来、旧京梨園、更不見搬演者矣！」とある。

（33） 傅惜華「関漢卿雑劇源流略述」（『戯曲研究』1958年第３期。浜文庫／雑誌／14）の105頁「(3) 閨怨佳人拝月亭」の記述による。漢劇の「風雲会」は、傅論文では「風雨会」に作る。

（34） 楊宝春『『琵琶記』的場上演変研究』（上海：上海三聯書店、2009）は『琵琶記』上演史を詳細に調べた成果で、その研究方法は濱と一致する。同書には「近、現代舞台上的《琵琶記》演出情況，幾乎不在研究者的視野之中」（９頁）とあり、半世紀前の濱がいかに独創的であったかを物語っている。

（35） 目加田誠「浜さんのこと」７頁。

（鳴謝）本文公開發表私人書信之際，得到了歐陽予倩先生的女兒歐陽敬如女士的同意和許可。謹在此表示衷心的謝意。

（謝辞）書簡の公表にあたって、欧陽予倩氏のご令嬢・欧陽敬如女士より許可をいただいた。また、濱一衛先生のご令嬢・藤本康子氏からもご快諾いただいた。謹んで深甚の謝意を表したい。

欧陽敬如女士との連絡に際して福岡大学の間ふさ子先生より、また書簡の内容に関して熊本学園大学の石汝杰先生よりご教示いただいたことに感謝する。濱文庫資料の閲覧・公開に際してご厚意を賜った九州大学附属図書館に謝意を表する。

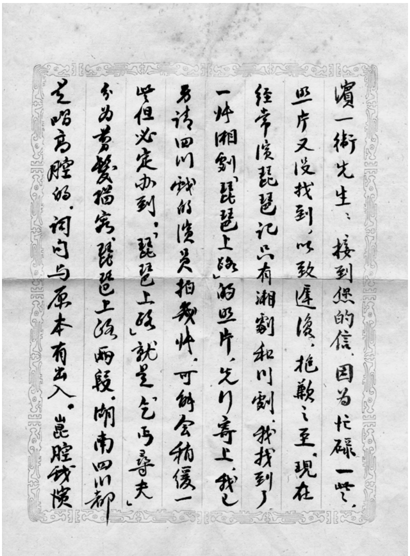
濱一衛先生、接到你的信，因為忙碌一些、
照片又没找到，以致遲復，抱歉之至。現在
經常演琵琶記只有湘劇和川劇，我找到了
一件湘劇「琵琶上路」的照片，先行寄上。我已
另請四川戲的演員拍幾件，可能会稍緩一
些但必定办到。「琵琶上路」就是「乞丐尋夫」
一分为黄發描容，琵琶上路兩段。湖南四川都
是唱高腔的，詞句与原本有出入。崑腔戲演

図３　欧陽予倩致濱一衛書簡第一葉
［濱文庫／追（2008）／48］

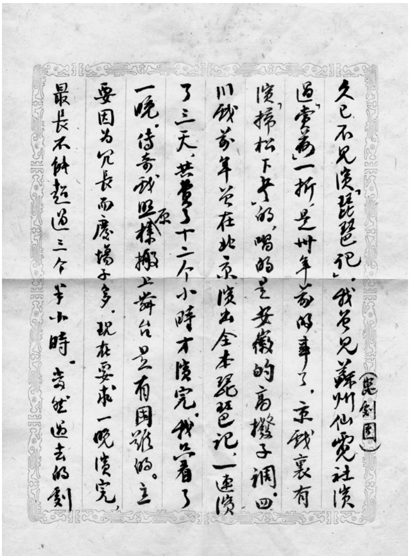
久已不見演琵琶記。我見過蘇州仙霓社（崑劇團）演
過「賞荷」一折，是卅年前的事了。京戲裏有
演「掃松下书」的，唱的是安徽的高撥子調。四
川戲前年曾在北京演出全本琵琶記，一連演
了三天，共費了十二个小時才演完。我只看了
一晚。倘要我照原樣搬上舞台是有困难的。主
要因为它長而廢場子多。現在要求一晚演完，
最長不能超過三个半小時。當然過去的劇

図４　同第二葉

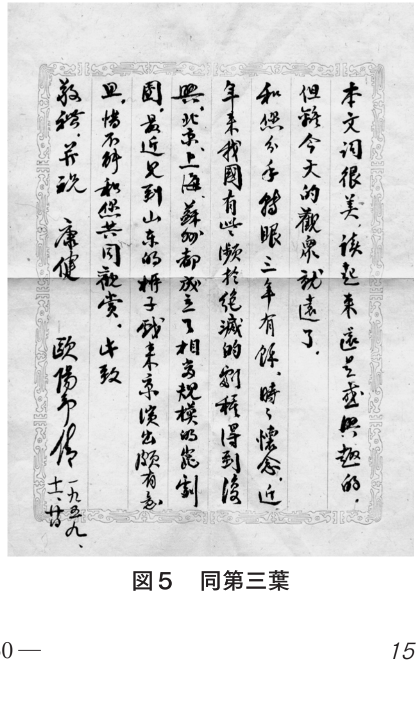
本文詞很美，談起來還是甚有興趣的。
但離今天的觀衆就遠了。
和你分手轉眼三年有餘，時時懷念。近
年来我國有些瀕於絶滅的劇種得到復
興，北京、上海、蘇州都成立了相当規模的崑劇
團，最近見到山東的梆子戲来京演出頗有意
思，惜不能和你共同欣賞。专此致
敬禮，并頌
康健
欧陽予倩
一九五九、十、廿

図５　同第三葉

図６　信封背面消印（部分）